

『鎮將府日誌』について

(その二・太政官日誌との併読)

中西 淳朗

一、平成七年九月三十日の例会において、(その一・序説を發表したが、その際、『鎮將府日誌』の概略を紹介した部分に誤りがあった(日本医史学雑誌第四一卷第四号一三五頁)ので次の如くに改める。

『鎮將府日誌』は十四×二十一センチ、一号が美濃紙十五枚ほどの、木版刷の和綴本で、全二十七号三百五十余丁となつている。記事は慶応四年七月七日から十月十八日までのことを記している。

二、前回にもふれたが、鎮將府日誌に書かれている記事が必ずしも太政官日誌に書かれてはいない、或はその逆もあつたり各藩からの報告に混乱がみられる。これを正す作業は大変な労力を要し、一氣に解決出来るとは思えない。

三、混乱のひとつの例として、上野彰義隊との戦に参加し負傷後、横浜軍陣病院で死亡した薩摩藩の益満休之助、床次吉之助、貴島勇右衛門の三名の死亡日について、関寛斎日記、幕末維新全殉難者名鑑、横浜軍陣病院の日記、杉並大円寺の墓誌で調査し比較したところ、すべて一致している者は認めなかった。

益満の場合は、関寛斎が誤報とは知らず床次の死亡日を益満の欄に記入しているし、床次の場合は墓誌に数字が脱落するという単純ミスがあるし、貴島の場合は名鑑に理由不明の日が入っている。

四、このような情報混乱が存在することをふまえた上で、鎮將府日誌や太政官日誌等を併読していかなければならぬ。

そこで日誌類をリスト・アップして相互関係を求めることとした。

A、太政官日誌。慶応四年二月十七日より書きはじめ、明治十年一月第一号で終り、全一、一七七部である。

B、東征軍関係。

1、江城日誌。慶応四年五月五日より五月末まで記す。全十五号(実質内容は閏四月二十九日より六月十二日まで)、他に前編がある。

2、鎮台日誌。慶応四年六月一日より七月二十七日までを記す。全十二号。

3、鎮將府日誌。慶応四年七月七日より十月十八日までを記す。全二十七号。

4、東京城日誌。明治元年十月十三日より同二年三月二十七日までを記す。全二十九冊。

C、東京府日誌。慶応四年八月十七日より九月七日までを記し、以後は東京城日誌に吸収された。

右の如き官発行の日誌に対して、横浜軍陣病院の日記は未

発行で、慶応四年閏四月十八日から十月十八日までを記しており、病院の入院患者に関する研究に際しては、AからBの3までの四種の日誌を日記と比較しつつ調査する必要があることが解かった。

五、そして横浜軍陣病院が、慶応四年七月二十日に設立された東京大病院の支営の立場におかれ、大病院を支配取締した機関が、東京府、鎮將府（九月十三日から十月十八日まで）、そして東京府と変った点も考慮に入れて調査研究をする必要性も存在することが解かった。

（平成九年九月例会）

荒川保雄：虱に賭けた四十年の生涯

佐分利 保雄

荒川保雄は明治二十六年会津に生まれ、大正六年東京農科大学を卒業した。大正十一年ユタ州立農科大学に入学、昆虫学を専攻し、大正十四年に卒業、理学士の称号を得た。大正十五年、南満州鉄道（株）に入社、農事試験場公主嶺支所、熊岳城支所の病理昆虫科にて、主としてコロモジラミの研究に専念し、千数百枚におよぶ学位請求論文を完成させ、休暇を得て、帰省中、平町（いわき市）四倉海岸にて急逝した。四十歳であった。先輩、僚友、遺族によって、この論文を「衣虱の研究」と題する単行本とし、満鉄の奨学資金により自家出

版された。その内容をみると、東北人のねばりに西洋人の合理主義が加わり、繰り返し行われた実験の生データがそのまま記載されており、読むに難渋するほどであるが、六十年を経た今日でも、この本が他の研究文献に引用されていることは、彼の業績が高く評価されている証拠であろう。

二百二十一頁のうち、百五十八頁は生態学的研究に、二十二頁が解剖生理、十八頁が病原体の媒介に、残る頁はケジラミなどの記載に費やされている。

彼は日本を代表するしらみの研究者であったが、序文にもあるように「天彼に貸すに幾ばくの余命をもつてするならば、学会最高の榮譽を担い得たであろうものを……」まことに惜しいことであった。熊岳城分場長、渡辺柳蔵らの論文刊行委員により、一周忌にこの大著が出版され、世に出たことは、ご遺族の喜びとともに、後学者の為に大いなる遺産を残したと言うべきであろう。

（平成九年九月例会）

ペスト残影シリーズ その八

ライン川中流域に「ペスト残影」を求めて

滝上 正

第三回本大会で発表した後、さらに、ライン川中流域で確認できたペスト残影について紹介したい。